# 飛鳥資料館の開館展示

飛鳥資料館学芸室

1974年3月16日，飛鳥資料館が開館した。観覧者数は，開館当日1618人，3月30日までで計9655人。幸先のよいスタートといえよう。これに先立って3月15日，開館式・特別公開をおこない，400人の招待客をむかえて祝福をうけた。

1973年4月，資料館が発足すると，学芸室・庶務室は，春日野庁舎に準備室をもうけて，活動を開始した。学芸室では，文化庁の国立飛鳥資料館（仮称）設置準備会議がまとめた展示計画（1972年2月）の基本方針を尊重して，展示方法とを検討し，所内の準備委員会の討議を経て，その原案を作成した。これによって，日本エキジビション企画プロダクション（代表国友俊太郎氏）が作った展示設計原案を，さらに準備委員会で煮つめることによって，大筋が決定，1974年12月に，同プロダクションに工事請負を依頼した。

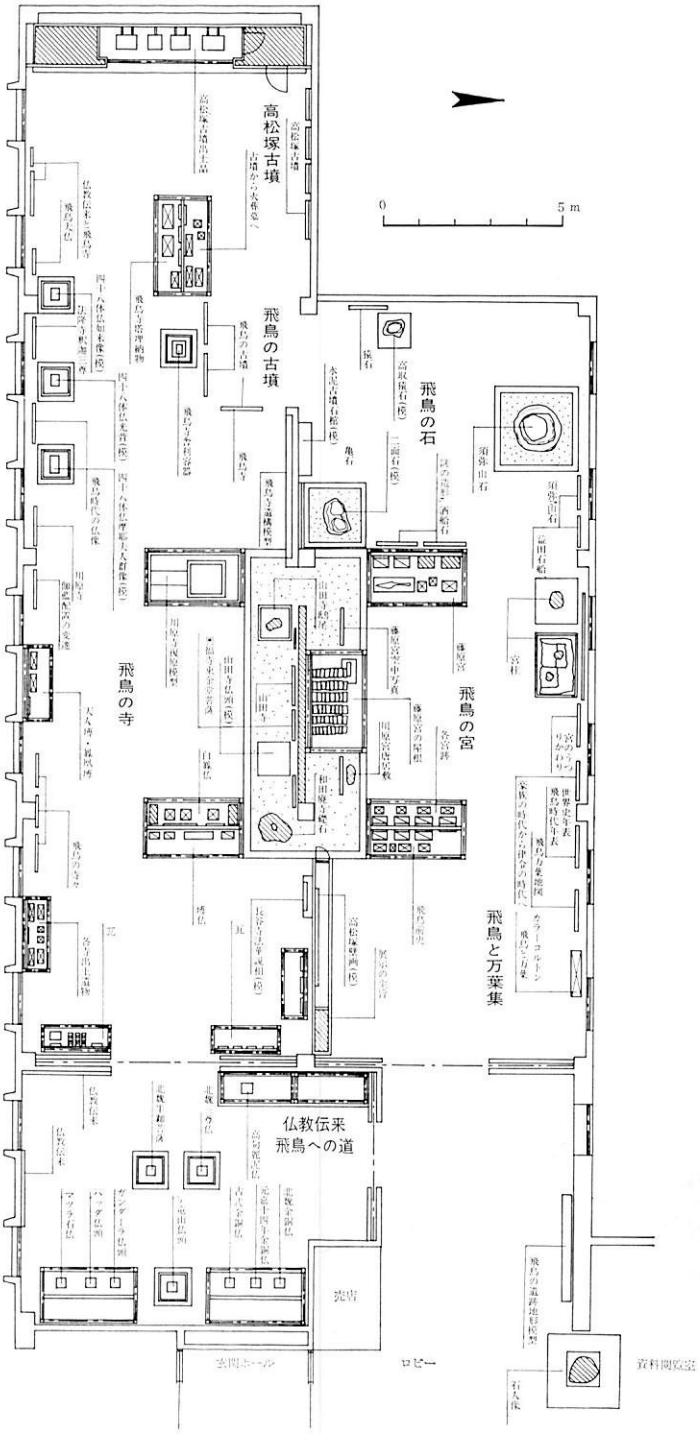
資料館には，常設展示用の第1展示室（390㎡）と，特別展示用の第2展示室（66㎡）がある。6月8日までの，開館記念特別展示期間中は，第1展示室も，高松塚古墳壁画の模写などによって，とくに充実し，また第2展示室では，ガンダーラ以来の仏像を中心として，特別展示「仏教伝来――飛鳥への道」を開催することにした。展示品・展示状況の詳細は，右頁の平面図，および開館にさいして出版した2種のカタログ，『飛鳥資料館案内』・『仏教伝来――飛鳥への道』にゆずる。なお，資料館の設立・建築・工事については，前年度年報の報告のほか，パンフレット『奈良国立文化財研究所飛鳥資料館』を参照されたい。以下，展示にかんする方針のうち，記録にのこっていない点を若干かかげておく。

陳列ケースは，両面・片面両用のものを，大・中・小3種類作成した。移動しないことを前提として作り，また，鍵が外面からみえない構造とした。高松塚古墳出土品用のケースは，やや豪華で，かつ閉館のさいに，ケース前面を鉄扉で閉ざす構造の，作りつけのものとした。

展示室内の採光は，人工光線によるものとしたが，同時に，窓を完全に閉ざすことなく，時には開けられる状況にとどめることにした。したがって，陳列ケースは，窓と窓の間，あるいは，窓から遠く離して配列することになり，展示室の中央に，大ケース4個をオーソドックスに相称的にならべた。展示室西北隅のブロックは，とくに重量に耐える構造になっており，石造物の展示場所は，おのずからこのブロックに限られることになった。また，高松塚古墳出土品用の作りつけケースは，展示室西南の奥まったブロックの西端におくことにした。このようにして，第1展示室の基本的な導線が決定したのである。

展示品を見やすくするため，しばしば斜面・垂直面への固定法を採用した。また展示品の意義をわかりやすくするため，随時，展示品を写真・図とくみあわせることにした。

解説文は，各項200字以内を原則とし，教育漢字以外には，ふり仮名をつけた。また「出土した」と書かず「みつかった」とするなど，やさしい言葉をえらぶようつとめた。（佐原　眞）




第1図　飛鳥資料館の展示状況